

〈意志〉と〈推量〉の疑問形式

宮 崎 和 人

1. はじめに

〈意志〉を表すムード形式「シヨウ」は、文を終止する動詞の語形の一つとして、〈命令〉のムード形式「シロ」、〈叙述〉のムード形式「スル」と、〈述べ方＝叙法〉の点で対立する。また、〈推量〉を表すムード形式の「スルダロウ」は、〈叙述〉のムード内部で、〈確認〉を表す「スル」と、〈認識の仕方〉の点で対立する。また、〈意志〉と〈命令〉は、動詞のみに分化する〈実行〉のムードとして共通し、〈叙述〉のムードと対立する。

(1)

実行	意志	シヨウ
	命令	シロ
叙述	確認	スル
	推量	スルダロウ

日本語のムードの基本体系をこのように考えるなら、「シヨウ」に〈推量〉を表す用法が限定的に存在する^(注1)ということを除いて、「シヨウ」と「ダロウ」には直接の接点はないということになるが、両者は、

(2) 映画を「見に行こう／見に行こうか」。

(2') 太郎も映画を「見に行くだろう／見に行くだろうか」。

(3) 明日、映画を見に行こうと思う。

(3') 太郎も映画を見に行くだろうと思う。

のように、疑問形式を有し、動詞「思う」の引用文中に生起するという性質を共有する。さらに、「シヨウ」は〈勧誘(行動要求)〉へ、「ダロウ」は〈確認要求〉へと、対話において聞き手に対して要求を行う用法をとともに派生させていることも注目される。

そもそも、「ダロウ」は、「シヨウ」の推量用法が形式的に分化したものであり、ムード形式としての同質性が存在することは、当然のことであろう。「ダロウ」について論じるにあたっては、認識の形式どうしの比較だけでなく、「シヨウ」を比較の対象に据えることが必要であり、逆に、「シヨウ」を、意思決定という、一種の判断形成を表現する形式と認識するこ

とも必要であろう。この論文では、「シヨウ」「ダロウ」を広義判断形式と把握し、判断の形成段階という観点から、その疑問形式について考察したい^(注2)。

2. 広義判断形式としての「シヨウ」と「ダロウ」

「シヨウ」が〈意志〉の形式であることには疑いが無いが、「シヨウ」は、話し手がすでに有している〈意志〉を〈確認・記述〉するものではない。そうした意味での〈意志〉を表すのは「スルツモリダ」であって、「シヨウ」が表す〈意志〉とは、〈意思決定〉のプロセスである。これは、「ダロウ」が〈真偽判定〉のプロセスを表すことと平行的である。

(4) 今日は何をしようか。ドライブに行こうか。やっぱり、映画を見に行こう。

(5) これは誰の傘だろうか。太郎のだろうか。いや、次郎のだろう。

つまり、「シヨウカ」「ダロウカ」がそれぞれ〈意思決定前の迷いの段階〉〈真偽判定前の疑いの段階〉を差し出すのに対して、「シヨウ」「ダロウ」は、それぞれ〈意思の決定段階〉〈真偽の判定段階〉を差し出すのである。

このような「シヨウ」が表す〈意思決定〉は、明らかに一種の判断である。次の例では、「シヨウカ」の文と選択関係にある文が「～べきか」となっており、そのことをよく物語っているだろう。

(6) こんどは、すれちがいざま、あいているほうの指先を、くすぐるように、彼の脇腹におしこんできた。おどろいて、とびのきながら、あぶなくランプをとり落しうになる。このまま、ランプを持ちつづけていようか、それとも地面において、くすぐり返してやるべきか、いきなり思いがけない選択をせまられて、ためらった。

(安部公房「砂の女」)

また、次のような例では、意思決定への迷いを「シヨウカ」ではなく「ダロウカ」で表現している。

(7) 私は朝飯とも午飯とも片付かない茶碗を手に持ったまま、どんな風に問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分の好くない病人らしく見えただろうと思います。

(夏目漱石「こころ」)

「シヨウ」と「ダロウ」は、話し手が発話行為時に何らかの判断を下すという点で共通し、下される判断が、話し手がこれからとるべき行為についてのものなのか、命題内容の真偽についてのものなのか、という点で異なると考えられる。また、それぞれの疑問形式「シヨウカ」「ダロウカ」によって差し出される事柄は、話し手がとるべき行為や真である命題として採用される候補の一つである。

(8) どうしようか。すこし歩いて、気持を落ちつけてからたべようか、それともコー

ヒーでも飲んでみようか、などということを中途半端に考えながら歩いていると、新橋の駅前に出てしまった。(椎名誠「新橋島森口背春篇」)

- (9) いざ仕事にかかってみると、なぜか思ったほどの抵抗は感じられないのだ。この変化の原因は、いったい何だったのだろう? 水を絶たれることへの恐怖のせいだろうか、女に対する負い目のせいだろうか、それとも、労働自身の性質によるもののだろうか? (安都公房「砂の女」)

この二つの例((9)の第二文は「カ」が省略されている)は、まず、wh 疑問文で判断すべき課題を設定し、続いて、下される判断の候補を選択的に提示するという判断形成のプロセスが、「シヨウカ」と「ダロウカ」に共通して成立することを示している。以上のように、「シヨウ」と「ダロウ」は、それぞれの疑問形式「シヨウカ」「ダロウカ」と、基本的に、<判断の決定段階・未決定段階>という判断形成段階の表し分けという点で対立しており、さらに、未決定段階における候補提示の方法を、wh 疑問・選択疑問・yes-no 疑問という疑問文のタイプによって表し分けしているという点で、次表のような平行性を有しているのである。

(10)

未決定段階			決定段階
候補未提示	複数候補提示	単一候補提示	
wh 疑問文	選択疑問文	yes-no 疑問文	非疑問文
どこに行こうか (どこにしようか)。	山に行こうか、それとも、海に行こうか(山にしようか、それとも、海にしようか)。 海に行こうか、行くまいか。 海に行こうか、どうしようか。	海に行こうか (海にしようか)。	海に行こう(海にしよう)。
誰が来るだろう か。	太郎が来るだろうか、それとも、次郎が来るだろうか。 次郎は来るだろうか、来ないだろうか。	次郎が来るだろうか。 次郎は来るだろうか。	次郎が来るだろう。 次郎は来るだろう。

なお、このような判断形成段階の表し分けは、話し手が考えをまとめていくプロセスの反映であるので、基本的には、独話的なテキスト(独り言・心内発話)において成立することになる。

3. 疑問文のタイプによる未決定段階の表示

以下、しばらく、疑問文のタイプごとに判断の未決定段階がどのように表示されるのかとすることを、「シヨウカ」と「ダロウカ」を対照する形で観察していく(注3)。

3. 1 wh 疑問文

行為そのものの実行はすでに決意されているのだが、その行為内容に未決定の部分があることによって、最終的な意思決定がなされていないというときには、wh 疑問文の「シヨウカ」を用いる。

- (11) —まさかとは思うが、今朝、夫がいやに早く起きたこと、ハイヤーを呼ばなかったことを思い出すと、不安が増して来る。

久子はしばらく迷っていたが、「念のためだわ」と自分に言いわけしながら、受話器を取った。しかし、どこへかけよう？ 社へ電話して、「すみません、主人はまだ社長でしょうか」と訊くのも妙な話である。（赤川次郎「女社長に乾杯！」）この例では、電話をかけるという行為実行の意思は決まっていて、「かけるべきところはどこか」ということが未決定なのである。

「～ニスル」という選択行為を表す構文が用いられることもある。

- (12) 近くで夕食を済ませてしまおう。どの店にしようか、と迷っている、
「伸子さん」

と、声をかけて来たのは、林昌也だった。（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

- (13) あの時は一時間もかかって念入りに化粧をし、着物をどれにしようかと随分と迷った。頼圈にこれという感情もないのに若いという新妻に負けたくない一心であった。（渡辺淳一「花埋み」）

(12) は「どの店で夕食をとろうか」、(13) は「どの着物を着ようか」と言い換えることができるだろう。

また、何か行動をとらなければならないが、とるべき行動そのものが思いつかない場合には、「ドウシヨウカ」が用いられる。

- (14) まずは典型的な若者の部屋だ。さて、どうしようか。

ともかく、昌也が何かを隠しているとしたら、果たしてどこへ隠すかである。それが何なのかも分からないのだから困ってしまうが、ともかくせっかく苦勞して忍び込んだのだから、捜すだけ捜してみよう。（赤川次郎「女社長に乾杯！」）

「ダロウカ」の wh 疑問文の場合も、(11) のような「シヨウカ」と平行的に、述語の表す事柄そのものは成立しているのだが、命題内容に未確定な部分が存在することによって、最終的な判断を下しえていないということが表される。

- (15) 翌日、教室で川村朔子はいつものように化粧気のない顔を伊木の方へ向けていた。
「この娘のどこに惹かれているのだろうか」

と、伊木は自らに問うてみた。（吉行淳之介「樹々は緑か」）

この例では、惹かれているという事実を認めたうえで、「惹かれているところはどこか」ということが未確定なのである。

なお、「ダロウカ」には、(12)～(14)に直接対応する wh 疑問文の用法はないようである。逆に、次のような「ダロウカ」に対応する用法は、「シヨウカ」にはない。一つは、いわゆる反語である。

(16) 「教授のいない大学に一体誰が授業料を払おうとするのであろうか」という私の意識。
(高野悦子「二十歳の原点」)

(17) *こんな雪の日にどこに出かけようか。

もう一つは、原因・理由を問題にする wh 疑問文である。

(18) それにしても壁新聞は、二日も三日も前に焼跡の各所に貼られていた筈である。
なぜ僕は今までそれに気がつかなかったのだろうか。(井伏鱒二「黒い雨」)

(19) *なぜ遊びに出かけようか。

3. 2 選択疑問文

多くの選択疑問文の使用例が見つかるという点でも、「シヨウカ」と「ダロウカ」は共通する。「シヨウカ」の選択疑問文には、次の三つのタイプがある。

第一のタイプは、複数の行為を選択候補として取り上げるものである。

(20) 私は近くの沖にゆっくり明滅している廻転燈台の火を眺めながら、永い巻のよ
うな夜の終りを感じていた。舷の触れ合う音、とも綱の張る音、睡たげな船の灯、
すべてが暗く静かにそして内輪で、柔やかな感傷を誘った。何処かに捜して宿をと
ろうか、それとも今の女のところへ帰ってゆこうか、それはいずれにしても私の憎
悪に充ちた荒々しい心はこの港の埠頭で尽きていた。(梶井基次郎「冬の鯉」)

第二のタイプは、行為内容の未決定部分に入る可能性のある要素を選択候補として取り上げるタイプである。このタイプには、(21)のように、「～ニスル」構文を用いるパターンと、(21')のように、行為を明示するパターンとがある。

(21) 私は頭の上にぶらさがった鉄道地図を、じっと見上げて駅の名を一つ一つ読んで
いた。新らしい土地へ降りてみたいと思うなり。静岡にしょうか、名古屋にしよ
うか、ただ何だかそれも不安で仕方がない。(林芙美子「放浪記」)

(21') 静岡へ降りようか、それとも、名古屋へ降りようか。

第三のタイプは、一つの行為の実行・不実行を選択候補として取り上げるタイプである。このタイプには、(22)のように、「スルマイカ」を後続させるパターンと、(23)のように、「ドウシヨウカ」を後続させるパターンとがある。

(22) 三合七勺瓶には中身がまだ三分の一ぐらい残っていた。飲むうか飲むまいか。瓶

のコルクを抜き、匂を嗅ぎ、コルクをしめ、台所へ行って、コップを探していると
警戒警報が出た。(井伏鱒二「黒い雨」)

- (23) 停車場前の茶店から月日亭に電話をかけて見ようか、どうしようか、一寸彼は
迷っていた。(志賀直哉「瑣事」)

では、「ダロウカ」との対応を見てみよう。まず、第一のタイプに対応するのは、述語部分の異なる複数の命題を選択候補として取り上げるものであると考えられる。

- (24) 私はしばしばその少女と連れ立って、夕食後など、宿の裏の、西洋人の別荘の多い水車の道のあたりを散歩するようになっていた。そんな散歩中、ときおり、一月前までは私と一しょに遊び戯れたりしたことさえある村の子供たちと出会うようなこともあったが、彼等は私たちの傍を素知らぬ顔をして通り抜けていった。もう私を覚えていないのだろうか、それとも私がそんな見知らない少女と二人づれなのを異様に思ってしまうのだろうか? (堀辰雄「美しい村」)

次に、第二のタイプに対応するのは、述語以外の部分の異なる複数の命題を選択候補として取り上げるものであると考えられる。

- (25) 老人は私の頭蓋骨の響きから、いったい何を讀みとるのだろうか? 彼は私の記憶を讀みとるのだろうか、それとも私の記憶の外にあるものを讀みとるのだろうか? (村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)

第三のタイプに対応するのは、述語部分が肯定・否定の関係で対立する二つの命題を選択候補として取り上げるものであると考えられるが、そうした「ダロウカ」の例は、実際には見出しにくい。

- (26) 先生は何故幸福な人間と云い切らないで、あるべき筈であると断わったのか。私にはそれだけが不審であった。ことに其所へ一種の力を入れた先生の語気が不審であった。先生は事実果して幸福なのだろうか、又幸福であるべき筈でありながら、それ程幸福でないのだろうか。私は心の中で疑々らざるを得なかった。けれどもその疑いは一時限り何処かへ葬むられてしまった。(夏目漱石「こころ」)

のような例が一応それらしきものであるが、

- (27) 先生は幸福なのだろうか、それとも、幸福ではないのだろうか。

のような例は、不自然ではないものの、冗長な感じがするし(「先生は幸福なのだろうか。」と言えは十分という気がする)、実際の用例としてもほとんど出てこない。

3. 3 yes-no 疑問文

一つの候補を取り上げる yes-no 疑問文では、その候補の捉え方に関して、「シヨウカ」と「ダロウカ」の違いが大きく現れる。

まず、「シヨウカ」の場合には、基本的に、ほぼ意思決定がなされた段階を差し出す。

- (28) 「私も一つ、日参でもして見ようか。こう、『うだつ』が上らなくっちゃ、やりきれない」
(芥川龍之介「運」)

特に、「サア」「サテ」「ソロソロ」などに後続する場合は、「シヨウ」にかなり近づく。

- (29) さて帰ろうかとソファから立ち上がり、今度は自分で明かりを消して玄関を出ようとドアを開け、

「キャッ！」

と思わず声を上げる。
(赤川次郎「女社長に乾杯！」)

- (30) もう二時だし、そろそろねようか。
(高野悦子「二十歳の原点」)

これに対して、「ダロウカ」では、

- (31) ところが、玉枝をみてからは、喜助は玉枝に魅かれた。ほかの女のことを考えるわけにゆかなくなった。玉枝を女房にできたら……喜助はそのことを夢にみるものがあつた。しかし、玉枝はきてくれるだろうか。

喜助の考えでは、それは五分五分の可能性と不可能性をもっていた。というのは、玉枝は父親を好いていたということである。
(水上勉「越前竹人形」)

のように、取り上げた候補を選択する・しないに関して話し手の態度が中立的であるという例や、むしろ、取り上げた候補に対して、話し手が疑念や否定的な見方をもっていることが意味される例が少なくない。

- (32) 椎名 ほんとによく続いたな。あの事務所を借りた時、目黒と一緒に、「こんなとこ借りちゃって、おれたちいいんだろうか。生きていけるんだろうか」って、二人でしゃがんで四角い窓を見上げていた。

(群ようこほか「群ようこ対談集 解体新書」)

特に、「本当ニ」と共起した場合には、その傾向が強くなる。

- (33) 本当に昔の方が良き時代だったのだろうか？ 私にはわからない。自分の青少年期を、まるごと全体としてふり返ってみるとひどく怖い気がする。もう一度、あの頃に帰ってみたいなどとは、金輪際おもわない。
(五木寛之「風に吹かれて」)

- (34) この崔という男は本当に柳のマネージャーなのだろうか。不安になって、遠まわしに文化放送の申に訊ねると、崔がその問いを引き取って答えた。柳は間違いなく私の選手だ。何千万もの金を使って自分の選手にした。(沢木耕太郎「一瞬の夏」)

これらの例のように、「本当ニ」と共起した「ダロウカ」の文は、所与の情報の信憑性を疑う意味になる。

これと逆に、「ヤハリ (ヤッパリ)」と共起した「ダロウカ」の文は、その可能性が一段と

高まったということが示される。

- (35) それなら福岡にしてはどうか。福岡・札幌間もだいたい二時間少々とみてよいか、安田が板付発八時前に打ったとしたら、およそ河西の手に十一時ごろ配達されるという時間は合うのだ。(それでは、やっぱり福岡から安田は打電したのだろうか?) (松本清張「点と線」)

「モシカシタラ (モシカスルト、モシカシテ)」と共起した場合も、その事柄が成立する可能性を考えながら述べることになる。

- (36) やがて河が見えてきた。そのむこうに塔が立っている。照明が当てられ、光が滝のように流れている。もしかしなら、あれがワシントンなのだろうか。 (沢木耕太郎「一瞬の夏」)

そして、否定疑問文になると、事柄が成立する方向に判断が傾いていることを表すようになる。

- (37) かなりの速度で、甲板上の小さな人影をのせて突き進んで行く。大きな波が、船体の両側に盛り上り、十二本の鎖が、海獣の群れのように水飛沫をあげながら曳かれて行く。

対岸に激突しないだろうか。渡辺の胸に、不吉な予感が甦った。対岸の丘を視野から隠した船体が、そのまま丘に突っ込んで行くような錯覚をおぼえた。

(吉村昭「戦艦武蔵」)

特に、「シハシナイダロウカ」という組み立て的な述語では、控えめながら、話し手が一定の主張を行っていることが表される。

- (38) アメリカにおける人種差別の背後に、私は白人種の黒人に対する不安と、嫌悪の葛藤を感じる。それは、彼らが、黒人を人間と区別せず、同じ族として考えているからではないかと思う。アメリカの人種差別問題は、肉親の愛憎に似てはいないだろうか。 (五木寛之「風に吹かれて」)

あるいは、次の例のように、話し手が〈懸念〉を抱いていることが意味されることもある。

- (39) さまざまの花が入り混って咲くだろうか。百日草、金盞花、矢車草、鶏頭……、こんなに密生しては、結局枯れてしまいはしないだろうか。

(吉行淳之介「砂の上の植物群」)

4. 選択候補提示と有力候補提示

前節での観察から、「シヨウカ」と「ダロウカ」の相違に関して、次のようなことが窺える。yes-no 疑問文の「シヨウカ」は、ほとんど意思決定がなされている段階を差し出し、単な

る選択候補の一つではなく、有力候補を取り上げていると見られる（話し手は行為実行に前向きになっている）。まったく意思決定できずに迷っている段階では、yes-no 疑問文ではなく、選択疑問文が用いられる。これに対して、yes-no 疑問文の「ダロウカ」は、取り上げた候補に対して話し手が疑念や否定的な見方をもっていることが少なくなく、「ダロウカ」自体には、有力候補を提示する機能はないと思われる。このことは、有力候補提示の「シヨウカ」が「思う」の引用文に現れて一応の結論としての意味を表しうるのに対して、「ダロウカ」は「思う」の引用文で使用できないという事実によって裏づけられる（注4）。

(40) 僕もそろそろ結婚しようかと思う。

(41) *彼女は僕を嫌っているのだろうかと思う。

「ダロウカ」の文でも、前節で見たように、否定疑問文（「シナイダロウカ」「シハシナイダロウカ」）を使用して、話し手の判断がその候補を選択する方向に傾いていることが示されることはあるが、これも、有力候補を提示する手段にはなりきっていないと考えられる。

(42) ??彼女は僕を |嫌っていない/嫌ってはいはしない| だろうかと思う。

以上のように、「シヨウカ」における選択疑問文と yes-no 疑問文の対立が、選択候補提示と有力候補提示の関係であるのに対して、「ダロウカ」においては、両者の対立は弱く、yes-no 疑問文も、基本的には、選択候補を提示しているにすぎないと見られる。「ダロウカ」に (27) のような典型的な肯否型の選択疑問文がほとんど見られないのは、中立的な yes-no 疑問文がその役割を担っているからであろう。

そうすると、〈推量〉の系列においては、有力候補提示を専門に受けもつ表現形式が存在しないということになるが、その機能を補充しているのが、「ノデハナイカ」（「ノデハナイダロウカ」を含む）という形式ではないかと、筆者は見ている。「ノデハナイカ」なら、「思う」の引用文にきわめて自然に収まり、意味的にも有力候補を提示していると思われる。

(43) 彼女は僕を嫌っているのではないかと思う。

また、「ノデハナイカ」が有力候補提示の専用形式であることは、これが選択疑問文で使用できないことから窺える。

(44) *彼は長男なのではないか、それとも、次男なのではないか。

さらに、「ダロウカ」の文と「ノデハナイカ」の文をこの順に並べることによって判断の継起性が表現されるという事実がテクストレベルで観察されることが指摘できる。

(45) 学校へ行き、職場の雰囲気の中に身を置いてもその気分は変らなかった。むしろ、「彼」が今自分と同じ建物の中にいるのだ、すぐ近くにいるのだという思いで尚さら落ちつかず、さらに、「彼」は今日学校に来ているのだろうか、昨夜遅くまで自分と一緒にいたせいで遅刻でもしているのではないか、などと思い、「彼」がいる

筈の教室の前まで様子を見に行ったりした。 (筒井康隆「エディプスの恋人」)

- (46) 人間がしんげんに思い詰めるということは、よかれあしかれ本物だし立派だ。こんなどこぞ対等に、本気であいつとぶつかることができたんだ。

——それなのにいま、隠していた余罪がばれたという。本当にそんなことがあったのだろうか、おれがひっかかったように、あいつもまた世間のやつらの罠におとされたんじゃないのか。そうだとすると、あんなひどいことをするんじゃないかなかった、と栄二は思った。 (山本周五郎「さぶ」)

こうした例は、「ノデハナイカ」が「ダロウカ」より一歩進んだ判断形成の段階を表示している——有力候補を提示している——ことを物語っているように思われる^(注5)。

以上をまとめると、〈意志〉の系列においては、選択候補提示と有力候補提示の対立が統語的に〈疑問文のタイプによって〉示され、〈推量〉の系列においては、それが述語形式(「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の区別)によって示されるということになる。

- (47)

	選択候補提示	有力候補提示
意志系列	シヨウカ (選択疑問文)	シヨウカ (yes-no 疑問文)
推量系列	ダロウカ (選択疑問文、yes-no 疑問文)	ノデハナイカ

安達 (2002a) は、迷いを表す「シヨウカ」は、wh 疑問 ((48)) や選択疑問 ((49)) のときには埋め込み節に格下げできるが、yes-no 疑問 ((50)) では容認性が落ちるという興味深い事実を指摘している^(注6)。

- (48) 本屋で何を買おうか迷った。
 (49) この本を買おうかどうか迷った。
 (50) ?この本を買おうか迷った。

これについても、(47) のような把握によって容易に説明できるだろう。「シヨウカ」は yes-no 疑問においては有力候補提示の機能をもつ。有力候補提示という態度と「迷う」という動詞の語彙の意味が矛盾するのである。

なお、〈意志〉の系列においては、述語形式による判断の未決定段階の表し分けはないものの、行為実行のタイミングが問題になり、この点について、述語形式のパリエーションが豊富である。例えば、「シヨット」の文は、

- (51) 鮎太はオシゲがどこからか持って来た稲荷ずしを御馳走になり、部屋に電燈の点つたのを合図にそこを引き上げた。

「うちも行こうと」

そう言って、オシゲも一緒について来た。(井上靖「あすなろ物語」)

のように、意思決定と実行が同時的である(注7)。また、「スルトニシヨウ」は、

(52) その翌日は、日曜日に当たっていた。

月曜日から仕事に戻ることにしよう、と伊木一郎は心を定めた。そして、その午後、山田理髪店に出かけていった。店の中は閑散としている。

(吉行淳之介「砂の上の植物群」)

のように、意思決定したことだけを述べる。さらに、「スルトシヨウ(カ)」は、

(53) 「雲か。雲を眺めるのはいいことだ。どれ、俺も寝ころんで雲を眺めるとしようか」

安は行助のそばに来てすわると、腕枕をして草原に寝ころんだ。

(立原正秋「冬の旅」)

のように、意思決定というよりも、実行宣言になっている。

5. 〈勧誘〉〈意見要求〉用法における融合型の視点制約

本論文では、独話的な用法を中心に考察したが、最後に、「シヨウカ」「ダロウカ」が聞き手めあてに使用された場合にも興味深い類似性が認められることを指摘しておきたい。すなわち、〈勧誘〉の「シヨウカ」と〈意見要求〉の「ダロウカ」の類似性である。

「ダロウカ」は、(54)のように、話し手だけでなく、聞き手も知らないことについて問いかけ、意見を求めるために使用されることがあるが、(55)のように、通常、聞き手が知っていることについては使用されない(注8)。

(54) ねえ、この事件の犯人は捕まるだろうか？

(55) *ねえ、もうご飯食べただろうか？

宮崎(1993)では、「ダロウカ」が対話で使用される場合の視点を「融合型」と呼んだ。当該情報に対する知識状態に関して、話し手と聞き手が同じ立場にあるということである。

「シヨウカ」が〈勧誘〉に使用される場合にも、これと同じような事実が観察される。

(56) 僕たちも明日のパーティーに行こうか。

(57) *君も明日のパーティーに行こうか。

(56)は、話し手が聞き手と共同して意思決定を行おうとするもの、(57)は、すでに意思決定を行っている話し手が聞き手に同じ意思決定を行うよう促すものである。(56)のみが成立するのは、〈意見要求〉の「ダロウカ」と同様、〈勧誘〉の「シヨウカ」にも、融合型の視点制約が働いているからであると見られる。

なお、〈確認要求〉の「ダロウ」と「シヨウ」にはこの制約はなく、(55)、(57)のような状況でも使用できる。

(55') もうご飯食べただらう？

(57') 君も明日のパーティーに行こう。

注

- 1 標準語では、「～と言えよう」「～と考えられよう」「～と見ることができよう」といった、皆き言葉での主張を控えめにする用法には限られる。
- 2 判断形成過程を表す形式として「シヨウ」と「ダロウ」の機能を統一的に説明しようとしている研究として、森山(2000)がある。ただし、森山が「シヨウ」「ダロウ」の形式自体の意味(諸用法に通じる意味)を判断形成過程の表示(未決定な述べ方)とするのに対して、筆者は、判断形成的な意味の実現の根拠をあくまでも「シヨウ」「ダロウ」と「シヨウカ」「ダロウカ」の形態論的な対立を求める。
- 3 安達(2002b)では、文脈内で実現する意味によって、意志の表出の疑問化である「シヨウカ」の用法を「思考中、迷い、決定の直前」に、疑いの「ダロウカ」の独話用法を「判断不明、思考過程、疑念」に分類している。ただし、疑問文のタイプとの関係や二形式の平行性には言及していない。
- 4 これは、非過去形の「思う」が〈態度表明〉といったモーダルな意味を表すことによる。過去形では、単にそのようなことが頭に浮かんだという意味で、「～だらうかと思った。」も可能になる。
- 5 「ダロウカ」と「ノデハナイカ」の関係についての詳細な議論は、紙幅の都合上、すべて宮崎(2001)に譲る。
- 6 安達は、この事実に対して、yes-no 疑問の「シヨウカ」は、特に聞き手めあてといった対他的モダリティを帯びているために、埋め込み節へ格下げできないという説明を行っている。
- 7 こうした「シヨット」の意志表現としての性質については、藤田(1989)の言う「直接的意図引用」(「一眠りしようと眠り込んだ。」)といったタイプの引用構文との関係を考えることが必要であろう(この構文の述語部分が現実の行為に置き換わったものか)。
- 8 ただし、丁寧体「デシヨウカ」は、質問を丁寧化する機能をもち、聞き手が知っていることについても使用できる。

参考文献

- 安達太郎2002a 「疑問文とモダリティの関係」『日本語学』21-2
———2002b 「第1章 意志・勧誘のモダリティ」「第5章 質問と疑い」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版
仁田義雄1989 「「行こうか戻ろうか」——意志表現の疑問化——をめぐって」『日本語学』8-8
藤田保幸1989 「「意図引用」の諸相——「仇を討とうと旅に出る」などの表現について——」『愛知教育大学研究報告』38 (人文科学編)

宮崎和人1993「「〜ダロウ」の談話機能について」『国語学』175

——2000「ムードとモダリティ」『日本語学』19-5（4月臨時増刊号）

——2001「認識的モダリティとしての〈疑い〉——「ダロウカ」と「ノデハナイカ」——」『国語学』52-3（206）

——2002「第4章 認識のモダリティ」『新日本語文法選書4 モダリティ』くろしお出版

森山卓郎2000「第1章 基本叙法と選択関係としてのモダリティ」『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店

〔付記〕本論文は、大阪大学大学院博士論文作成演習（2001年2月1日）の発表資料に基づく。ご指導くださった工藤真由美先生に感謝申し上げる。また、末筆になったが、下河部行輝先生のご退官に際して、これまでに頂いた数々のご恩に対して心より謝意を表したい。

（みやざき かずひと 岡山大学文学部助教授）

『岡大國文論稿』第三十号（工藤進思郎先生退官記念号）
平成十四年三月発行）要目（その二）

論文

夏目漱石「それから」論——「自然の背に帰る」代助の生き方を中心に——
具 賢淑

志賀文学における小動物の死の心象風景について
呉 保華

江戸川乱歩「二銭銅貨」——「言葉」と「現実」の間——
山田 直樹

坪田譲治文学の絵画性について
劉 迎

三島由紀夫『豊饒の海』における局面を表す複合動詞の研究
趙 南弼

新刊紹介
大坪併治著『石山 四分律古點の國語學的研究』・三宅ちぐさ
寺本 博士古稀記念論集 樓伽林學報 學術典籍研究第四輯
「大友信一博士古稀記念論集」學術典籍研究第四輯 江原由美子

大友信一監修 木村晟／草玉茹編輯 古辭書研究文獻1『漢和三
五韻の研究 資料篇』 江原由美子

古辭書研究文獻2『聯句連歌と韻書の研究 資料篇』
藤森賢一著『日本靈異記私解』 中村 暁子

藤森賢一著『鴈外獨斷』 渡辺 護

藤森賢一著『岡野捷尊と周辺の詩人たち』 藤原 邦寛

山根智恵著『日本語の談話におけるフィラー』 塩見 曠

山根智恵・久木田恵著『基礎から学ぶ日本語表現法』 江 雪 梅

佟君著『子規文學の思想と精神』 白神由紀江

……サファイアリン・マラト